「舞姫」に関するレポート

一、はじめに　　テーマ設定の理由

私はレポートのテーマを「続・舞姫」に決めました。
なぜなら、私は論理的な文章を書くことが苦手です。だから、本文中から根拠を指摘し意見を述べる、というスタイルを避け、何らかの形で「舞姫」を書き直す、という方法をとりました。
当初は「舞姫」を現代風に書こうと決めていました。しかし、いざ書き始めてみると収拾がつかなくなり、しかもクラスでまわし読みをしてもらったところ、「オリジナルの要素が強すぎる、もっとストーリーや設定を忠実にすべきだ」とか、「登場人物の性格をもっと丁寧に書いてほしい」などあまりよろしくない評判を頂き、あきらめました。
次に思いついたのが、今回提出した「舞姫」の後日談でした。
というのも、舞姫を呼んで気になったのが、相沢にすべてを告白された後の、エリスの描写の少なさです。愛するひとと自分、そして２人の子供の幸せな生活を夢見ていたはずなのに、エリスは突然豊太郎が自分から去っていくことを知らされ、どん底に突き落とされたのです。
その嘆きはきっと激しいものだったに違いありません。
立った数行で片付けてしまってよいものだろうかと私は不満に思いました。
さらっとするなよ、鴎外め、と心の中でぼやきました。
（まあ彼にしてみたら主人公は豊太郎なのですからそれ以外はあっさりと
　済ませたかったのかもしれませんが。）
こうなれば自分で続きを書くしかない、と思いました。豊太郎帰国後のエリスを主人公にした続編を書こう、と思いました。
以上のような理由で私はレポートのテーマを「舞姫」の後日談に決めたのです。

二、本論

たった一つの恋だった。世界は七色に輝き、それは絶えることなくずっと続いていくのだと思っていた。終わりが来るなんて微塵も疑わなかった。
永遠の愛。そんないかにも嘘くさい、陳腐な言葉を本気で信じていた。踊り子の自分には一生かかっても手に入れることのできない幸せをやっとつかんだのだとそう、思った。
でも、違った。あのひとは上司に付いて国へ帰ってしまった。
残されたのは、わずかなお金。残されたのはあのひとのこども。私は大きな
おなかを抱えて1人、色あせた世界に漂う。明けない夜は太陽が再び輝くときを、ただひたすらに待ち続けている。ただ、ひたすらに。
　先月、ついに舞台を下ろされた。膨らんだおなかは隠しきれず、ついに座頭の知るところとなった。怒りで顔をどす黒く変色させた彼は、私に詰め寄り、はき捨てるように言い放った。
「てめぇのせいでなぁ、俺がいったいどれだけの迷惑を被られて
ると思っているんだ。さっさと出てけ、二度とここへは来るんじゃねぇっ」
初めのころはまだ、いつか自分の元に戻ってきてくれるのかもしれない、と淡い期待を糧に生きていけた。でも時がたつにつれ、その「いつか」は永遠に来ないのだと思い知らされた。
　鏡台に向かい、じっとその奥を覗き込む。虚ろな瞳をした自分がいる。手足はやせ細り、青白く浮きでた血管が見える。
　髪にそっと手をやる。根元に指を這わせ、すく。散々かきむしったせいでぼさぼさになってしまったけれど、その豊かさは以前のままだ。
自慢の金髪。きれいだね、とあのひとがよくなでてくれた、私の一部。
　体がかすかに震え始める。引き出しからはさみを取り出し、頭に当てる。
ジョキジョキッという音とともに、髪の毛が床に落ちる。
「なにをしてるのっ」
鏡を通して、驚きで顔を引きつらせた、母の顔が見える。私のもとへ走りより、腕をつかんではさみを奪い取る。
「出産前の大事な体なのに・・・。あなた、最近薬もちゃんと飲んでない
　みたいじゃないの」
いやだ。母親なんてなりたくない。これ以上一人で生きていたくない。あの人が私の元を去ったとき、私のこころは死んだ。ばらばらになって壊れてしまった。
中身を失った器に生きる意味などあるのか。いくら問うても答えは見つからない。
出口のない迷路にいるようだ。

（季節は夏に移り、いよいよ陣痛が始まった。）

胸をつかみ、喘ぐ。苦しい。部屋中の空気がどんどん薄くなっていくようだ。
「もう少しだからがんばるのよっ」
母が声を上げる。視界が歪む。このまま奈落の底へ落ちていきそうな、そんな気がする。二度と這い上がることのできない、深くて暗い穴の中へ。
たまらなくなって私は叫ぶ。助けて。助けて助けて。愛しいその人の名を呼び、天井へ向かって手を伸ばす。
あぁ、豊太郎。豊太郎。あなたはどこにいるの。何をしているの。
その黒い瞳には、誰を移しているの。
必死に腕を伸ばすが何も届かない。手は空を切り、勢いを失ってどさっと音を立てて崩れ落ちた。再び上げようとするが動かない。どんなに力を込めても体は言うことを聞かない。全身が痙攣を始める。（おしまい）

三、まとめ

本文から根拠を探す必要ないからと気軽にはじめたこの作業、予想以上に難航しました。結末をどう書いていいものやら、散々悩みました。本編では結局日の目を見ることのないエリスですが、実は当初の計画ではハッピーエンドとバッドエンド、２パターンの結末を一応、用意していたのです。実際書いてみて、よりしっくりくるほうを本筋として決めようと考えたのでした。
ちなみに、エリスが自分の髪の毛をはさみで切ってしまうところまでは両方共通です。ハッピーエンドのほうでは耐え切れなくなったエリスが家を飛び出し橋の上に行き入水自殺をはかるのですが、そのとき都合よくおなかの子供が暴れだし、痛みのあまりうずくまっているところを通りがかりの親切なおばさんに助けてもらいます。おばさんの家でしばらく休ませてもらっている間、彼女は落ち着きを取り戻し、もしかしたらあのとき胎内の子供が腹をけったのは、何が何でも自分が死のうとするのを止めようとするためのものではなかったのか、と考えます。自分を必要としてくれているこの児のためにも死んではならない、私はまだ生きなくてはいけないのだと思い直すのでした。
「舞姫」の中では不幸なまま終わってしまうエリスに幸せな結末を用意すべきだったのかもしれません。しかし、書き進めていくうちに、この女散々悩んでいたくせにそんな単純に解決してしまっていいのか、という疑問が生じ結局バッドエンドにしよう、と決めました。話をまとめきれず、尻切れとんぼで終わってしまったことが残念です。自分の乏しい文章力を露見してしまいました。